



## 「〇〇世代」名付けてくくるのはなぜ？

ニュースでよく目にする「団塊の世代」や「Z世代」。そもそも世代論は何のためにあるのでしょうか。「単身急増社会の希望」の著書があり、みずほリサーチ&テクノロジーズ主席研究員で日本福祉大学教授を兼任する藤森克彦さん(56)に聞きました。

みずほリサーチ&テクノロジーズ  
藤森克彦さんに聞く



## 論の芽

世代論は日本に限りません。例えば、「ベビーブーマー世代」は世界各国にいます。「団塊の世代」もこの世代ととらえられています。他国に比べて人口に占める比率が大きいので、社会に与えるインパクトは桁違いです。

そもそも世代とは、大体同じ時代に生まれた人々の総称です。世代が違えば、「体験してきたことや見てきた光景が違ふ」のが当然です。

例えば、日本における女性の就労は、1986年の男女雇用機会均等法の施行以降、段階的に整備されてきました。「均等法前世代」「第1次均等法世代」「第2次均等法世代」では、女性の働く意識や職場環境は随分と違いがあります。何を「常識」と考えるかは世代によって異なり、これが世代間のギャップを生む要因にもなります。

「世代論」はものの見方や考え方の違いが分か

りやすく、多くの人に受け入れられがちですが、それが世代間の分断に結び付いてはいけません。

少子高齢化が進み、社会保障分野では「高齢者世代が優遇されて、若者世代が不遇だ」という声をよく聞きます。しかし、高齢者への給付を減らして若者に回せばいいという話ではありません。

たしかに「就職氷河期世代」は、バブル崩壊という自分に責任がない要因で非正規労働や無職になった人が多い世代です。生まれた「時代」が人生に影響を及ぼしたという面は否定できません。就労支援などの強化が必要だと考えます。

しかし、だからといって、世代間の対立をあおるのは不毛です。例えば、日本の高齢者の貧困率は国際的にみても高い水準です。また、いまは家族の形が大きく変わろうとしている時代なので、高齢者も若者も以前より家族に頼ることが難しくなっています。独り暮らしであっても安心して生活できる社会の構築を目指すべきです。だからこそ、世代を超えて、支え合う社会を築くことが大切だと思います。